

## Communication, Miscommunication, Dis-communication, False-communication

鷺尾友春

(関西学院大学フェロー)

Communication, Miscommunication の問題を、伝達手段の領域を超えて、その背後にある意図、更には、その意図に大きな影響を及ぼすと思われる状況、を視野に入れて論じる。それが、本発表の眼目であった。

此处で改めて、各種ケースを分類しておく、以下の4つが考えられる。

- ①意図を鮮明に読み取る、或いは伝達する→Communication
- ②意図を取り違える→Miscommunication
- ③意図を隠す、それ故、騙す要素が入る→Dis-communication
- ④当初の意図が変質してしまう→False-communication

問題は、③と④の場合であろう。

ここで、意図と状況の関係を整理すると、状況が当初の意図を変えてしまう場合と、逆に、意図の強い意志で、むしろ状況の方を従わせようとする場合、の2つに分類され得る。

そしてこの2つの対比は、アジア流戦略思考（もっぱら老子的）と欧米流戦略思考（クラウゼビッツ流）の対比に連なる。前者は、「道は無形であり、現実には常に変化している。しかし、変化の中にも基調というものが横たわっており、その基調は一極に振れると、直ぐに反対の方向に向かう。それ故、弱者が勝利しようとするれば、“形勢”を良く見て、物事の自然な流れ（循環的流れ）を、上手く活用しなければならない」、という孫子流アプローチとなる。このアプローチが、相手との関係で、③と④を導く。

後者は、「ゴールは予め決めておくもの。目的達成には、あらゆる手段を動員する必要がある。戦争すら外交の一手段」という、強い意志と事前の計算を強調するアプローチとなる。このアプローチでは、あくまでも①の領域で事に処そうとする。

もちろん、こうした分類は、たぶんに便宜的だと批判されるだろうが、現実の米中関係を整理する際には、結構有効だと思料される。

たとえば、「勝利は強制や行動ではなく、必然的な流れを通じて獲得されるべき」と中国は孫子流に考える（デレック・ユアン）。こうした中国のアプローチが今や米国に、「北京の指導者が米国に見せたがっている中国は、真の中国ではない」（マイケル・ピルズベリー）との疑念を齎すに至っている。

以前は、米国でも、「中国は、将来、米国のようになりたがっている」と好意的に考える向きが多かった。ところが、オバマ政権下の2013年3月、習金平主席が米紙ウォールストリートジャーナルに「強中国夢」構想を話す頃になると、米国内保守派が、そんな中国の潜在脅威を強調するようになってくる。

それ以前の中国は、鄧小平の韜光養晦（才能や野心を隠し、古い覇権を油断させ…）路線を忠実に踏襲してきた。その限りにおいては、米国全体の対中観を刺激することも少なかった。だが、トランプ大統領が誕生し、状況が変わる。

トランプ自身、そこまでの深読みはしていなかっただろうが、持ち前の損得勘定思考で、「米国は長年、中国に騙されてきた」との論陣を張り始める。そして、それが今や深化し、ホワイトハウスや米国議会内で、中国異質論を定着させ、対中貿易戦争、或いは、対中覇権戦争を引き起こし始めている、と考えられるのだ。中国の孫子流発想を、米国が見咎め始めたのだ。習近平が本音を明かしたのが、早過ぎたのだ。